

その 10

を と め 下総国の聖娘子

「真間の手児奈」



真間の井

勝鹿(かつしか)の 真間娘子(ままのをとめ)を詠める歌一首并せて短歌

「鶏(とり)が鳴く 東の国に いにしへに ありけることと 今までに 絶えず言ひける 勝鹿の 真間の
手児名が 麻衣(あさきぬ)に 青衿(あおくび)着け 直(ひた)さ麻を 裳には織り着て 髪だにも 搔
(か)きは梳(けつ)らず 履(くつ)をだに はかず行けども 錦綾の 中に包める 斎(いは)ひ子も 妹にし
かめや 望月の 足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 水門入りに
舟榜(こ)ぐごとく 行きかぐれ 人の言ふ時 幾許(いくばく)も 生けらぬものを 何すとか 身をたな知り
て 波の音の 騒(さわ)く湊の 奥つ城(おくつき)に 妹が臥(こ)やせる 遠き代に ありけることを 昨日しも
見けむがごとく 思ほゆるかも」

(東国に昔あったこととして、今まで絶えることなく言い伝えてきた葛飾の真間の手児名が、麻の服に
青い襟を付け麻糸を裳に織って着て髪さえ梳らず履をさえ穿かずに歩いて行くけれども、錦や綾の中
に包んで育てたお嬢様だって、この子にはかなうまい、満月のように満ち足りた顔で花のように笑みを
浮かべて立っていると、夏の虫が火に飛び込むと言うように港に入ろうと舟が漕ぎ入って来るように寄り
集まり、男たちが求婚する時、どれほど生きていないのに、どうしようと己が身を分別して、波の音が
騒々しく寄せる港の奥津城に娘は臥せっておいでなのか。遠い昔にあったことなのに、昨日見たか
のようにありありと思われることよ)

高橋虫麻呂

(巻 9・1807)

「勝鹿の 真間の井見れば 立ち平(なら)し 水汲ましけむ 手児名し思ほゆ」

(葛飾の真間の井を見ると、ここに何度も通っては水を汲んだであろう手児名のことが偲ばれるよ)

高橋虫麻呂(巻 9・1808)

今回から数回にわたって、千葉県を舞台に万葉集ナウな話を進める。「え？千葉県？万葉集ナウが、なぜ千葉県？」。その通り、誰もが同じ疑問を持つことだろう。現在の千葉県は、当時の東国（現在の関東地方）の上総国と下総国、そして安房国の房総3国にあたる。この房総3国の奈良時代の人口は推定で約26万人。日本全国の総人口が約550万人、奈良の都があった大和国が約33万人と推定されるから、それほど人口が少なかったわけではない。千葉の地名の由来は諸説あるが、一般的には「多くの葉が茂る豊かな地」とされている。つまり、実り豊かな豊穡の地、気候温暖で住みやすい国として、古代から東国の中では多くの人が住んでいたものと思われる。その証か、古代の前方後円墳の数が、わが国で一番多いのが千葉県、それも断トツで多い。しかし、当時の政治、文化など社会の中心は大和などの畿内であり、東国は辺境の地、都人は東国を未開の地とみなしていた。文化的にも遅れていて、万葉集で見ると、東国の歌、東歌も、房総3国で、上総国3首、下総国5首、安房国はなし、と合わせて8首しか残されていない。こと程左様に、房総3国は都の文化や万葉集などとは縁遠かった……と、思い込もうが、ところがどっこい、必ずしもそうでもないのである。

何はともあれ、まずは「万葉」と「千葉」を見比べてほしい。万と千が違っただけだ。万葉と千葉（ちば）はもちろん違うが、これが千葉を（せんよう）と読むとどうなる？なに、「万葉」と「千葉」が同じ意味って？万葉集があるなら、千葉集もある？大伴家持が、今の千葉県知事だったそう？その家持が寄進した大鳥居が今も残っている？家持以外にも、千葉県と縁がある万葉ファンタジスタが2人もいた？その内の1人は歌聖と呼ばれ、千葉県の生まれで墓も千葉にあるんだって？何より耳寄りのニュースが、千葉の2人の美女の名が奈良の都にも轟いたんだそう？など等、嘘のような本当の話、本当のような嘘の話が、千葉にはいくつかあるのだ。嘘の話とは、噂や「伝承」も含めて、と理解いただいた上で、千葉は紛れもなく「万葉集ナウ」なのである。

そこで、それら噂の真相を順次検証していくことにする。

まずは、ホットニュースの2人の美女と2人の万葉ファンタジスタにスポットを当てる。2人のファンタジスタの内の1人は、「昔々万葉の昔、常陸の国（現在の茨城県）に、その名もファンタジックな虫云々というファンタ爺（ジー）さんがいたとさ。隣国の下総の国によき娘子（おとめ）がいると聞けば行って話を聞き、上総の国にいい女がいると聞けば、ちょっと出かけて行ったそう。また、筑波の山に夫婦交換の歌会があると聞けば勇んで自分も参加し、摂津の国に妻争いで自死した3人の男女がおると聞けば、その墓に参り、同じ摂津の国に竜宮城のお姫さまに会い結ばれたという浦嶋爺さんがいたと聞けば行って話を聞き、面白い面白〜いファンタ爺さん歌集を作ったとさ」という、ファンタ爺さんこと、高橋虫麻呂である。かくのごとく、本人が昔話になってもいいほどに、日本各地の伝説や伝承を歌に詠んだことから、伝説歌人などと呼ばれた異色の歌人である。虫麻呂は、「柿本人麻呂歌集」と同じように、万葉集成立以前に「高橋虫麻呂歌集」

を編纂したとされるが、その原本は残っていない。万葉集には虫麻呂の歌 34 首が収められているが、そのほとんどは虫麻呂歌集からとられていることから見ても、虫麻呂の歌と名前は、万葉集のおかげでかろうじて現代に残ったのだ。

虫麻呂の歌風は、叙事性、抒情性に富み、歌には、夢想、幻想、幻影、空想、憧憬が詠み込まれていると評される。34 首の内長歌が 14 首と多く、まさに夢物語、つまりファンタジーを詠み語る万葉ファンタジスタと呼ぶに最も相応しい伝説歌人である。

そこでまず取り上げるのが、冒頭の歌である。千葉の 2 人の美女の内の 1 人、下総の真間の手児奈を詠んだ歌である。その歌からは、手児奈が海に身を投げて死んだと詠まれているわけではないが、それに今も残る手児奈の伝説は時代によって異なるが、概ね、次のようである。

「手児奈は、その美しさゆえ多くの男性から求婚され、しかも自分のために人びとの争うのを見て、人の心を騒がせてはならぬと、自ら真間の入江に身を沈めた」（手児奈霊神堂の案内より）という、日本各地に残る美女伝説、いわゆる乙女伝説の 1 つである。この手児奈は当時から人気で、手児奈を詠んだ歌は他にもあり、前述した下総の東歌 5 首の内 4 首は手児奈に因んだ歌である。手児奈を民謡として謡ったものが東歌として残ったのではとされているが、次の 2 首は、虫麻呂の長歌の一部に符合している。

「葛飾の 真間の浦回(うらみ)を 漕ぐ舟の 舟人騒く 波立つらしも」 下総国歌(巻 14・3349)

(葛飾の 真間の浦辺を 漕ぐ船の 船人たちが騒いでいる 波が立ってきたらしい)

「葛飾の 真間の手児名が ありしかば 真間のおすひに 波もとどろに」 下総国歌(巻 14・3385)

(葛飾の 真間の手児名が いた時分は 真間の近辺では 荒波がとどろくように人々が言い騒いだものさ)

真間の手児奈を詠った残りの東歌 2 首と、さらにもう 1 人の万葉ファンタジスタ山部赤人が詠んだ長歌と反歌 2 首は、後に紹介することになる。

ところで、虫麻呂は、当時政権の中枢にいた藤原家の 4 兄弟の 1 人で、参議藤原宇合(うまかい)の部下であったため、宇合が養老 3(719)年常陸国守として、上総、下総及び安房 3 国の按察使(あぜち)に任命され赴任した時、宇合に同行して常陸国の下僚となったとされている。従って、隣国下総や上総他東国各地に出向いてはご当地の伝説等を歌にしたのだろう。真間の里からほど近いところに、下総国の国府があったことから、下総の国庁や虫麻呂が勤めた常陸の国庁を通じて、手児奈の話は遠く都にまで伝わり、多くの都人の心をとらえ、辺境の地の美女へのあこがれもあり、手児奈の名は鳴り響いたのだろう。



手児奈霊神堂

そこで手児奈ナウ、現代はどうかというと、地元ではその名は今も当時のままに鳴り響いている。かつての葛飾は、東京、埼玉、千葉にまたがっていたが、葛飾の真間は、現在の千葉縣市川市真間である。市川の街を歩くと、いくつか手児奈に因んだ史跡や記念物があり、また街のあちこちには万葉秀歌が書かれた掲示板や手児奈のシンボルマークなどが貼り出されるなど、今も万葉の面影が残っている典型的な万葉故地である。

京成線市川真間駅、或いは国府台駅から歩いて 10 分足らずのところに、手児奈を祀った手児奈霊神堂（手児奈霊堂とも呼ぶ）がある。この霊神堂について、案内には、次のように紹介されている。「美しく心優しい手児奈は自分のために男たちが争い傷つくのを厭って真間の入り江に身を投げました。文亀元年

（1501 年）に日与上人の夢枕に『手児奈』が現れたことから、その守護を誓い、奥津城処（墓）の跡と伝えられる辺りにお堂を建てました。これが現在の手児奈霊堂です。霊堂には、昔の入り江の面影を残す池が水をたたえています。以来、真間の地を守護する女神として多くの信仰を集めています」とある。こうして「清なる娘子」手児奈は、「聖なる娘子」になったのである。今も「良縁成就」、「孝子受胎」、「無事安産」を願って、手児奈霊堂にお参りする人の姿が絶えることがない。毎年 10 月には、手児奈を偲んで「手児奈祭り」が開かれ、霊堂や手児奈通りには各種露店やフリーマーケット等が出て多彩な催しが行われる。

また、霊堂の道をへだてた向かいにある「亀井院」というお寺の庭には、手児奈が水くみをしたという「真間の井」が残っている。街の一郭には、東歌にある真間の継橋が再建され、現在は橋の欄干を模した記念物が残されている。

手児奈の物語は、万葉の歌人たちを刺激しただけではなく、それら万葉ファンタジスタの歌に刺激されて、現代の作家や詩人、アーティストたちもまた、これまで手児奈をテーマに様々な作品を残している。

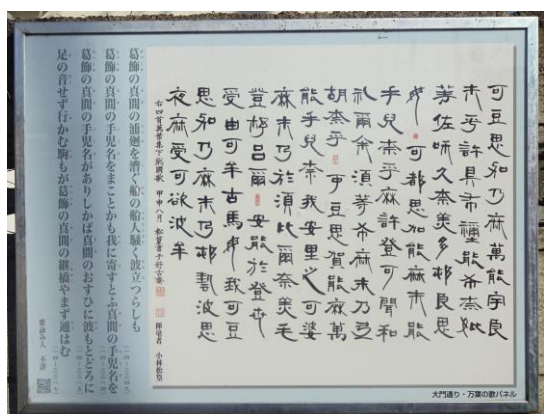
「真間の井」がある亀井院の庫裏には、かつて詩人の北原白秋が住んでいたこともあり、真間の井で米をとぎ野菜を洗っていたという。その白秋が真間の手児奈の歌を数首残している。

「葛飾の 真間の手児奈が 跡どころ その水の辺の うきぐさの花」

「この夏や 真間の継橋 朝なさな ゆきかえりきく 青蛙のこゑ」

「葛飾の 真間の継橋 夏近し 二人渡れり その継橋を」 北原白秋(『雀の卵』『葛飾閑吟集』)

舞台関係では、大正3年に、長谷川時雨作の戯曲「手児奈」、昭和に入ると田中澄江作の戯曲「手児奈と恋と」、金沢康隆作で歌舞伎「真間の手児奈」、平成に入ってから印東一雄作の戯曲「真間の夜ばなし」、そして、平成13年(2001年)の「手児奈フェスティバル」の一環として、別役実作の戯曲「当世風雨月物語」等が上演されている。音楽関係では、昭和30年、文部省の企画で安東英男作・服部正作曲の歌劇「真間の手古奈」が、200回以上公演され評判になったという。平成に入ってから、創作バレエ「てこな・愛の伝説」やオペラ「手児奈」等、特に平成13年のミレニアム文化振興事業「手児奈フェスティバル」として、オペラ「TEKONA～愛、そして手児奈」やミュージカル「ままでのてこな」他、江戸時代の浮世絵に始まる絵画や彫刻等の展示事業、それに毎年短歌や俳句などを対象とした手児奈文学賞など様々な事業が展開されている。かくのごとく、手児奈はまだ現代に息づき、今も現代人を刺激している。



街角の手児奈の東歌4首



短歌や俳句などの投函ポスト

千数百年もの昔の清らかな乙女物語、いわば処女伝説と言っても間違いではない乙女伝説は、確かに古から今に至るまで人々の心を惹きつけるファンタジーではあるが、なぜ古来これほどもてはやされるのだろう。美しく心優しく清らかな乙女が、何人もの男たちからの求婚を断って身を投げる。なぜか？同種の伝説に「かぐや姫」がある。かぐや姫に求婚した5人の貴人に無理難題を突きつけ拒絶して月に帰っていく。彼女の場合は男を信用できなかったり、そもそも地球の男と結婚する意思がなかった。また他の伝承では、神に仕える女や仙女は肉体性が切り離されて性愛を避けなければならないことから、多くの男たちから求婚されて、自死することも理解できないことはない。しかし、手児奈はどうか？手児奈がどのような女人で、なぜ自死に至ったのか。かぐや姫のような背景があるわけではなく、神に仕える身であるようにも読み取れない。そ

の意味では、万葉ファンタジスタ虫麻呂が詠んだ歌は、何かもの足りない、何か足りないのである。異色の歌人虫麻呂としては少しばかりきれいごとすぎ、真っ当にすぎるのである。

では、今さら乙女伝説をありがたがるはずもない現代のアーティストたちは、どうか。この歌をもとに、それぞれの戯曲やバレエ作品の中で、手児奈をどのように解釈し、どのような物語を作ったのだろう。とりわけ、幻想的独創的な作風で知られる日本の不条理劇の第一人者、劇作家別役実の「当世風雨月物語」はどうか？そもそも、その原作は、江戸時代後期の戯作者上田秋成の怪異小説集『雨月物語』の中の「浅茅が宿」である。市川の真間を舞台に、真間の手児奈伝説を踏まえて物語を積み重ねて創作されたものだ。それを、一筋縄ではいかない劇作家別役実が、さらに「当世風」に手を入れているわけだから、きれいごとの手児奈で収めているはずもない。果して最終的にどのような演出をしたのか見てみたいものだ。

そこで、虫麻呂である。独創的、幻想的な作風ということならその元祖であり、秋成や別役の先達といっても過言ではない虫麻呂……その虫麻呂は、他に策をめぐらしていた。手児奈の歌の他に、もう1つ手を打っていたのである。あえて俗な言い方をすれば、もう一人の娘に、二股をかけていたのだ。下総国の隣国、上総国、今では同じ千葉県内富津市のもう一人の娘子を歌に詠むが、その娘とは、聖なる乙女手児奈とは真逆の悪女だったのである。その名は珠名。

先に、万葉びとが一番愛した萩の花の魅力は豊潤と慎ましやか、豊満と清淑にあるのでは、と書いた。「豊満と清淑」。まさに、その形容がピッタリの2輪の花のごとき珠名と手児奈の2人の娘。現代の男たちのように、万葉の男たち、いや少なくとも虫麻呂が憧れた2つの女性像を、虫麻呂は2つの歌に詠ったのに違いない。真間の手児奈は何人もが歌に詠んだが、この悪女珠名を歌に詠んだのは、さすが異色、異能、異才の虫麻呂ただ1人。虫麻呂の真骨頂は、その2人の娘子を対にして歌に詠んだことにあるのではなかろうか。その珠名の歌は次回取り上げる。



真間の継橋